

資料 2

有識者ヒアリングの結果

資料 2 有識者ヒアリングの結果

1) ガンカモ類における全国の渡り集結地、渡り経路、採食地等に関するヒアリング①

氏名：佐藤文男氏（山階鳥類研究所研究員）

日時：2013年12月12日（18:00～20:00）

場所：（株）応用生物

〔ガンカモ類について〕

- ガンカモ類の渡り集結地と生息状況については、ガンカモ類一斉調査とモニタリング1000の報告書で把握することができる。渡り経路については、古いデータではあるが、鳥類アトラスでまとめられている。新たに追加できる情報は多くない。
- ガン類の渡りについては、日本雁を守る会による標識調査等の実績がある。ハクチョウ類の渡りについては、衛星追跡調査の実績はあるが多くはない。
- 全国のガン類の渡り経路は、太平洋ライン（個体群の9割）と日本海ライン（同1割）に大別される。その一部として、日本海と太平洋を横断する経路である、秋田県八郎潟と栗駒山を經由して宮城県伊豆沼を結ぶラインがある。八郎潟とその北側はため池等が多く、ガンカモ類にとって日本で最重要地域の一つとなっている。
- 東北地方のガン類の北帰行は3月の彼岸から月末までが多い。12月の第1の寒波で、北海道から東北北部に渡って来る。第2の寒波で東北南部に移動する。渡りの時期は北海道の天候に左右されるため、中継地であるウトナイ湖、宮島沼の飛来状況を把握しておく必要がある。
- 渡りの高度は、天候や移動場所への距離によって異なる。福島潟から最上川、最上川から八郎潟のような長距離の移動では、高高度での移動となり、肉眼では見えにくい程度の高度を飛行することがある。
- ガンカモ類の渡来地の条件としては、食物と埒の存在が重要である。
- マガン、コハクチョウは落穂を主食とするため、渡りの時も水田がある所に飛来する（道南ルート）。一方、ヒシクイ、オオハクチョウは水草類も食べるので、湖沼など水田がない所にも飛来する（道東ルート）。
- マガン・ヒシクイは越冬中、水田の落穂に依存している。中継地に積雪があると採餌できないため、飛来してもまた越冬地に戻ることもある。春先は積雪量が増えやすく、1週間単位で飛来状況が変わることもある。近年では積雪量が少なくなったせいか、八郎潟でも冬季に採餌できる場所が出現し、越冬するガン類も出てきた。
- ハクチョウ類は天然の水草類も食べるため、湖沼や河川の結氷・解氷と飛来に密接な関係がある。
- ガン類の埒の条件として、凍結しないこと、漁業活動がないことが挙げられる。埒から出る時は、一気に飛び上がって帯状に群れで出ていく。埒に入る時は、バラバラと群れごとに舞い降りることが多い。

- マガンは近年増えてきたせいか、行動も変わってきた様子がみられる。以前は道路から遠く離れた水田で採餌していたが、近くの水田でも採餌するようになった。以前は狩猟圧があったため、夜間に採餌していたが、現在は日中に水田で採餌するようになった。一方で、夜間の移動も普通に行っている。

〔海ワシ類について〕

- 海ワシの分布と飛来数は、人間活動の結果もたらされる餌資源に関連している。日本のサケのふ化・増殖事業は、海ワシ類やシマフクロウの食性・生態、生存に影響を与えている。
- サケの遡上量によっても、海ワシ類の河川への飛来数は異なる。獲れるサケがいなくなるまで、同じ河川に留まる傾向がある。
- 三陸沿岸の河川（津軽石川など）や北上川はサケの遡上量が多い。遡上したサケは河川に仕掛けられた止めに留まり捕獲される。東北一帯のサケは後期群である。北米産の銀サケは20年ほど前から輸入され、太平洋側で養殖されている。
- 小川原湖にもサケの止めがある。海ワシ類はワカサギ漁から出る雑魚を狙うことがある。
- 北海道のユーラップ川（八雲）にはサケが1月にも遡上する。サケが上流部まで自然遡上するのは国内では珍しい。漁協側は止めを外すと、上流に上がったサケを密漁者が獲って行くと言っており、全道的に止めは外さない傾向がある。
- 北海道では氷下漁で捨てられた雑魚や、狩猟・駆除されたシカの残滓を食べている。岩手県でも同様で、シカの残滓につき、山中に入っていく個体がある。
- 三陸沿岸では、海上に面した岬に止まり、海で魚類を捕食するオオワシもいる。オオワシはオジロワシに比べ、魚食性が強い。
- オオワシは冬季にオホーツク海から知床経由でサハリンに渡り、また風連湖、厚岸湖等に戻って来るといった渡りをする。
- 東北では年末にかけて（12月の第2回目の寒波後）、北部で海ワシが多くなる傾向がある。

2)ガンカモ類における全国の渡り集結地、渡り経路、採食地等に関するヒアリング②

氏名：呉地正行氏（日本雁を守る会代表）

日時：2013年12月24日（火）、13:40～16:30

場所：ホテルエポカ（くりこま高原駅）

- ガン類の渡来地や渡りに関する基本的な情報は、データは古いですが、ガン類渡来地目録でカバーしている。
- ガンカモ類の基本的な生息数と分布については、ガンカモ類一斉調査とモニタリング1000で把握できる。
- ハクチョウ類の渡りについては、発信機を装着した衛星追跡調査の実績がある。
- 大潟草原鳥獣保護区の定期観察記録は、八郎潟全体のガンカモ類の移動・利用を把握するのに有効である。
- 八郎潟は20万羽のマガン、ヒシクイ（亜種オオヒシクイを含む）、ハクガン、シジュウカラガンの渡来地である。東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップの登録地であり、次回のラムサール条約会議で登録湿地に推薦される予定である。
- 多数のガンカモ類が飛来する八郎潟に風力発電施設ができると、渡り鳥に対するトラップになることが懸念される。
- 八郎潟では、春の渡り期においてガン類は残存湖を埒として使い、徐々に干拓地の南部から北部に採餌場を移していく。渡去期終盤に入ると大友沼を埒に使う。例年ガン類は2月下旬～3月中旬頃までおり、3月上旬頃が个体数のピークとなる。
- オオヒシクイはまだ鳥屋野潟、福島潟に渡る个体群が残っているが、マガンは積雪に弱いため、ほとんどがすでに伊豆沼に来ており、八郎潟にはごく少数が残るだけである（2013年12月時点）。
- 十三湖については、春の融雪期が中継地として重要となるが、情報が限定されているため、詳細は不明である。4月以降に渡りが見られる。
- 小川原湖はハクチョウの越冬地となっている。伊豆沼から2月中旬頃から飛来する亜種ヒシクイ、マガンの中継地となっている。
- ガンカモ類はおそらく同じ個体群でも、場所によって習性を変える。八郎潟ではマガンの臨海距離は500mであるが、伊豆沼では50mと短くなる。ロシアではマガンは狩猟鳥である。
- 風力発電施設によるガンカモ類への影響は、衝突自体よりも渡来地の回避・放棄の間接的な問題の方が大きい。一方で、荒天候やヘリコプター等による緊急事態でパニックになった結果、衝突しやすくなることも考えられる。
- 風力発電施設によるガンカモ類への影響を推測する基礎データとして、レーザー測遠機を使い、3Dで移動経路、高度を記録し、いくつかの飛行パターンを把握しておくことが大切である。

3) 北海道・東北地方における海ワシ類の渡り経路、繁殖・越冬状況等に関するヒアリング①

氏名：中川元氏（知床自然大学院大学設立財団業務執行理事、知床博物館前館長）

日時：2013年12月2日（13:10～15:00）

場所：斜里町立知床博物館

- オジロワシ・オオワシ一斉調査は1980年以来、30年以上続けている。東北地方では、岩手・宮城の2県だけが継続して調査に参加しており、岩手県では日本野鳥の会宮古支部、宮城県では野鳥の会宮城県支部、南三陸ワシタカ研究会などが協力している。青森・秋田の2県も過去には参加していたことがある。
- 基本的に本州ではオジロワシは岩手県、宮城県に多く、オオワシは分布が限られているが、東北地方における海ワシ類に関する基礎情報は不足している。
- 一斉調査の結果をもとに、北海道におけるオジロワシの生息適地を示すポテンシャルマップについて、徳島大学の協力を得て作成している。
- 海ワシ類の生息状況を把握するためには、広い範囲をカバーして調査する必要があるが、個体数自体が少なくデータがあまり集まらないという点で難しい面がある。一斉調査等をする場合には、青森県では野鳥の会弘前支部の協力が得られるかもしれない。
- 生息状況の把握は地元の人でないと難しい。アンケート用紙を地元の研究者等に配布して、1年間の生息情報を集めるのも良い方法である。野鳥の会支部報をWEB等から収集して分析するのも良い。各地の鳥獣保護員による記録を収集・分析するという方法もある。
- 現地調査は、事前に生息情報の収集をしてから行った方が良い。バードリサーチ、弘前大学、日本イヌワシ研究会も、海ワシ類の情報を整理しているかもしれない。
- 海ワシ類の分布は餌の状況によって変わる。河川に止めがある場合は、サケがそこで留まり、その範囲が海ワシ類の採餌エリアになる。サケの産卵後は、12月末から1月にかけて止めを外すことが多い。また、増水時に上流部に上がったり、魚道の設置で以前より上がりやすくなっている。道内でもユーラップ川は、罅（針広混合林）、止まり木（営巣木？）、餌と生息に適した条件がそろっている。
- 罅入り後は、夜間どこに止まっているか、わからないことが多い。罅から出て来るのは、早朝まわりが少し明るくなった頃が多い。
- オジロワシとカモ類は同所的に見られるが、カモ類の渡りについてワシが移動するかは不明である。
- ロシアから北海道への渡りは、11月下旬までにはおおよそ終了する。北海道からの渡去は3月頃から始まる。
- オホーツク海沿岸の渡りでは、高度および経路の幅は様々である。高度は100m以上が多いが、100m未満でも飛行することがある。宗谷岬からの渡りはあまり高くない。風向・風力で渡りは影響される。オホーツク沿岸では半月で400羽ほどが移動したこともある。

- 北海道－東北間の渡り経路はほとんどわかっていないが、下北半島、津軽半島との短距離の移動である。東北へ南下を始めるのは12月初旬頃、本州からの渡去は2月末頃と思われるが、わかっていないことが多い。渡りのピークも不明である。
- 近年のオジロワシ増加の理由として、営巣環境の改善が挙げられる。工事前の環境アセスメントが慎重に行われるようになってきたこともある。しかし、営巣数は増えたが、繁殖成功率は下がるという不安定な状況にある。
- 知床半島では2013年は春先の大雪・突風のため、巣が落ちてしまい、繁殖結果は悪かった。繁殖成功率は30%ほどに落ち、巣立ち幼鳥数も3分の1に減った。少なくとも減少の原因を除去する努力が必要である。
- オオワシのロシア（サハリン、マガダン）での繁殖成績もあまり良くない。

北海道・東北地方における海ワシ類の渡り経路、繁殖・越冬状況等に関するヒアリング②

氏名：由井正敏氏（東北鳥類研究所所長）

日時：2014年1月14日（10:10～12:00）

場所：東北鳥類研究所

- 主に東北地方における海ワシ類の情報源となる団体・個人の紹介、資料の提供についてお願いした。青森県では下北野鳥の会、青森県野鳥の会あおもり、弘前支部、下北野生生物研究所など、岩手県では野鳥の会もりおか、宮古支部、北上支部など、宮城県では南三陸ワシタカ研究会などを紹介いただいた。
- オジロワシ・オオワシ一斉調査では、岩手県で20羽ほどが記録されている。東北全体では50羽ほどが生息するか。福島県にも飛来情報はあがるが少ない。
- 三陸沿岸、北上川沿い、伊豆沼、八郎潟、男鹿半島などが生息域として挙げられる。北上川沿いでは、内陸部から人造湖、伊豆沼などを伝って石巻付近まで飛来する。
- サケの遡上量に関連して、海ワシ類の河川への飛来数も変わると考えられる。太平洋側では秋に上がって来るサケを餌とするために南へ渡り、サケが少なくなったら内陸に移ってシカの残滓を餌にしている様子がみられる。北上山地東側では最近10年ほどは、狩猟者によって撃たれたシカの残滓を餌として定着・越冬している個体もいる。
- 日本海側では、サケの遡上量も少なく、シカも分布していないためか、太平洋側に比べて海ワシの数は少ない。
- 津軽半島の龍飛崎は北海道との渡り経路になっている。渡り時の飛行高度は一定ではないが、高くても数百mほどである。
- 下北半島では、繁殖しそうなオジロワシのつがいが2013年に確認されている。1952年までは三陸沿岸の重茂半島でオジロワシが繁殖していた記録がある。